

■ 資料

学生のVersantテストスコア推移について ～大阪市立大学GCC（グローバル・コミュニケーションコース） 事例より～

Analysis about students' score transition of Versant test
～ A case study about Global Communication Course in Osaka City University ～

渡 邊 席 子
大阪市立大学 大学教育研究センター

WATANABE Yoriko
Osaka City University, Center for Research and Development of Higher Education

抄録

本事例研究は、2013（平成25）・2014（平成26）年度の2年間にわたって試行された大阪市立大学グローバル・コミュニケーションコース（GCC）に所属する学生の学修成果のうち、特に、コース修了要件のひとつとして定められている約1か月間の海外研修で培った英語運用能力の推移を分析・考察することを目的としている。

以降、第1章にて、GCCについて説明するとともに、本研究の分析対象となっている英語運用能力指標（Versantテスト）について述べる。続く第2章にて、GCC_UVic（GCC正式登録者専用カナダ・ビクトリア大学研修）参加者のVersantテストスコアの時系列的変化について報告する。第3章では、第2章で述べたVersantテストスコア分析結果から見出された課題とその解決策案について述べる。

キーワード：学修成果、英語能力発達、海外研修成果

Keywords：Learning outcomes, Development of English ability, Result of the overseas language training

1. 本研究における課題提起

2013（平成25）年度に設置された大阪市立大学グローバル・コミュニケーションコース（以下、GCCと表記）は2年間の試行期間を終了し、プログラムの主要素は、2015（平成27）年度に設置されたグローバル・コミュニケーション副専攻（以下、GC副専攻と表記）に引き継がれた。また、2015（平成27）年度初頭、新入生に配布された大阪市立大学副専攻ガイド（大阪市立大学 副専攻運営小委員会、2015）において、GC副専攻の基本事項が公開され、2016（平成28）年1月現在、31名がGC副専攻第1期生として正式登録されるに至っている。

GC副専攻の前身となったGCC試行2年間の終了直前に記された渡邊（2015）の事例研究では、GCCの課題が3点挙げられていた。第一に、GCC正式登

録者専用カナダ・ビクトリア大学研修（以下、GCC_UVicと表記）の成果確認の必要性、第二に、GCC正式登録者に対するフォローアップの必要性、第三に、GCC修了認定者の学修成果の把握の必要性である。本事例研究では上記課題のうち、特に、初年次の春期に約1か月間GCC_UVicを経験した後、すなわち2年次になってからの、当該研修参加学生の英語運用能力を示す客観的指標のひとつとしてVersantテストスコアに着目する。そして、渡航前から2年次前期までの間に研修参加者の英語運用能力がどのように変化したのかを追跡し、分析・考察する。

1-1. GCC_UVicについて

GCC_UVicについては、渡邊（2014）にて既に詳細説明がなされている。よって本節では、ごく簡易に、この研修の特徴を紹介する。

GCC_UVicは、英語教育を専門とする大阪市立大学の教員と、カナダ・ビクトリア大学（University of Victoria : UVic）の英語センター（English Language Centre）とが協力し、GCC正式登録者専用の新しい海外研修プログラムとしてデザインされたものである。この研修に参加できるのは、GCCに正式登録が認められた学生のみである。

あわせて、GCCが本来、本学における英語運用能力中～上位者をターゲットとして設置されたことを受けて、GCC_UVicの内容および授業方法もまた、英語でのアウトプットを重視した高めのレベルでデザインされている。さらに、UVic側に支払う授業料に関しては、大学（教育推進本部経費）から補助金が出されることも決まり、英語圏での約1か月の研修としてはかなり廉価で参加することができるメリットが創出された。ただし、それだけのメリットを享受し、現地で真摯に学んで実力をつけてくるための前提として、参加者には、12月と2月に行われる事前研修への参加と、一定水準の英語運用能力が求められた^[1]。

1-2. Versantテストについて

本事例研究において、学生がもつ英語運用能力を反映する客観的指標として着目しているのは、Versantテストのスコアである^[2]。TOEICやTOEFL、英検に比べると、Versantテストの日本国内での知名度は低い。しかしながら、大阪市立大学では、2007（平成19）年度の英語教育改革以来、英語必修科目であるカレッジイングリッシュ（以下、CEと表記）習熟度別クラス編成のためのプレイスメントテストとしてVersantテストが用いられてきている。

TOEICやTOEFLのようにリスニングとリーディングを主とするテストと、Versantテストとの相違点は、Versantテストがリスニングとスピーキングを重視している点である。スピーキングを重視しているテストとして、日本では、一次試験に合格した者を対象に、二次試験にてスピーキングが課される英検が普及している。ただし、英検は一次試験合格通知から二次試験まで約1か月の時間を要し、かつ、受験のチャンスは年に3回に限られるのに対し、Versantテストは個人単位でいつでも受験可能であり、受験に要する時間

は1回当たり20分程度である。かつ、スコアの出力までに要する時間に関しても、圧倒的な即時性と利便性をもっている。さらに、ネイティブスピーカーが受験すると、どれだけ手を抜いて受けたとしてもほぼ確実に満点と採点されることから、英語運用能力測定テストとして信頼性の高いテストであるといえる。

Versantテストは、文章構文（文法）、語彙、流暢さ、発音の4つの軸で採点され、その結果に基づいて総合スコアが算出される仕組みをもつ。また、最低点は20点、最高点は80点と設定されている。テストは、電話もしくはインターネット回線を用いて実施され、英語による質問が回答者に対してなされ、それに対して回答者は英語で答え、その音声が機械採点される。日本人の場合は、総合60点をとることができれば大変高いスコアをマークしたといえる。それは、このテストが、何を答えるべきかがリスニングを介して理解できた状態で適切にスピーキングできているかどうかを採点しているからである。一般的にスピーキングが苦手な日本人にとっては難しいテストであるといえるだろう。

本研究の分析対象となるGCC_UVic参加者は、海外研修を介して学習したことによる成果を把握するため、GCC_UVicが実施される直前（1年次2月）と、帰国直後（2年次4月）にVersantテストを受験することが義務付けられている。さらに、2年次7月には、2年次後期のCE習熟度別クラス編成のため、英語必修科目であるCEの成績評価にVersantテストの受験結果が反映されることになっている。つまり、1年次2月と2年次4月のスコアを比較することでGCC_UVicの成果を確認でき、さらに、2年次4月と7月のスコアを比較することで帰国後約3か月が経過したのちの英語運用能力の推移を観察することができる。

2. Versantテストスコアで見えるGCC_UVic参加者の英語運用能力の推移

本事例研究の分析対象は、2016（平成28）年1月段階でGCCに正式登録しているか、もしくは、GCC修了認定（仮）を受けており、かつ、GCC_UVicに参加した35名^[3]のうち、1年次2月（出発直前）、2年次4月（帰国直後）、2年次7月（帰国後約3か月経過）

の3回のVersantテストをすべて受験している33名である^[4]。

表1 今回の分析対象者基礎データ (2015 (平成27) 年1月段階)

学部	GCC 第1期 正式登録者 H25入学者 現3回生	うち GCC_UVic 参加者数	GCC 第2期 正式登録者 H26入学者 現2回生	うち GCC_UVic 参加者数	GCC 第1期・第2期 正式登録人数 合計	GCC 第1期・第2期 GCC_UVic 参加者数合計 (うち分析対 象)
商学部	5	4	4	4	9	8
経済学部	4	3	4	2	8	5
法学部	3	1	11	7	14	8
文学部	6	5	7	6	13	11
工学部	0	0	1	1	1	1
医学部 (看護学科)	1	1	0	0	1	1
生活科学部	1	1	1	1	2	2
計	20	14	28	21	48	35 (33)

本章では、5つの節に分けて、今回の分析対象となった33名のVersantテストスコア推移を確認する。本章の1節から5節までにおいて、1元配置分散分析（被験者内要因）を用いた3回のテストスコアの推移を見るとともに、最後の6節にて全分析結果を簡易にまとめる。

2-1. Versantテスト総合スコア

「1-2. Versantテストについて」にて先述したように、Versantテストでは、文章構文、語彙、流暢さ、発音

の4つの種別にスコアが算出され、それらに基づいて総合スコアを求める仕組みになっている。よって総合スコアは、Versantテストで測定している4種の英語運用能力の総体的成果であるといえる。

それでは、今回の分析対象となった33名のGCC_UVic参加者について、まずは総合スコアの推移について分析する。分析方法は、従属変数をVersantテスト総合スコアとし、3回の受験時期を独立変数（被験者内要因）に置いた1元配置の分散分析である（表2）。

下位検定を行ったところ、2月の総合スコア平均

表2 Versantテスト総合スコア平均の推移

	1年次2月 (出発直前)	2年次4月 (帰国直後)	2年次7月 (帰国より3か月後)	分散分析結果
Versant総合スコア 平均 (標準偏差)	42.79 (5.49)	46.45 (5.36)	46.09 (6.09)	F (2) =24.87, p<.01

と4月の総合スコア平均、および、2月の総合スコア平均と7月の総合スコア平均との間には統計的に有意な差があり、かつ、4月の総合スコア平均と7月の総合スコア平均との間には統計的に有意な差があるとはいえないことがわかった。

前述したように、Versantは最低点20点、最高点80点であり、点数の振りが小さい。よって、3点以上の変化があった場合は、顕著に伸びた、もしくは衰

退したと判断することができる。上記分析結果より、Versant総合スコアに関しては、学生は出発前に比して帰国後に高いスコアをマークできるだけの英語運用能力をつけ、7月になっても伸ばした能力を保っている可能性があるといえる。

2-2. Versantテスト文章構文スコア

この節以降は、Versantテストを構成する4つの要

素、文章構文、語彙、流暢さ、発音それぞれについて、分析対象者33名のスコア推移を見ていく。2-1で述べたように、総合スコアに関しては、渡航前に比して渡航後のスコアが伸びており、そのスコアが3か月後の7月まで維持されている可能性が示された。では、4つの下位要素についても同様のパターンが見ら

れたのかどうかを確認することが、以降の節のねらいである。

まず本節では、文章構文スコアの推移について分析する。分析方法は、従属変数をVersantテスト文章構文スコアとし、3回の受験時期を独立変数（被験者内要因）に置いた1元配置の分散分析である（表3）。

表3 Versantテスト文章構文スコア平均の推移

	1年次2月 (出発直前)	2年次4月 (帰国直後)	2年次7月 (帰国より3か月後)	分散分析結果
Versant文章構文スコア 平均（標準偏差）	46.67 (5.15)	48.18 (5.58)	48.45 (6.71)	F (2) =1.83, ns.

上記の分析結果は、GCC_UVicに参加した学生の文章構文スコアは、出発前と帰国後、および帰国3か月後について顕著な差はなく、ほぼ横ばい状態であることを示している。GCC_UVic参加者は全員初年次の学生であり、大学受験準備として大学入試センター試験および個別学力試験の勉強に取り組んだ経験をもつとともに、日本で行われている英語教育の基礎を一定以上身につけて合格を勝ち取った者たちである。主に英語文法に関する能力を測定している文章構文スコアが横ばいなのは、そもそも日本の英語教育を受け入試の

関門を突破してきた学生たちが、すでに一定以上の文法を理解できており、その実力は海外研修経験や時間の経過によって影響を受けにくく安定している可能性を示している。

2-3. Versantテスト語彙スコア

続いて、語彙スコアの推移について分析する。分析方法は、従属変数をVersantテスト語彙スコアとし、3回の受験時期を独立変数（被験者内要因）に置いた1元配置の分散分析である（表4）。

表4 Versantテスト語彙スコア平均の推移

	1年次2月 (出発直前)	2年次4月 (帰国直後)	2年次7月 (帰国より3か月後)	分散分析結果
Versant語彙スコア 平均（標準偏差）	47.70 (7.89)	50.45 (6.38)	44.61 (7.74)	F (2) =7.94, p<.01

下位検定を行ったところ、2月の語彙スコア平均と4月の語彙スコア平均、および、4月の語彙スコア平均と7月の語彙スコア平均との間には統計的に有意な差があり、かつ、2月の語彙スコア平均と7月の語彙スコア平均との間には統計的に有意な差があるとはいえないことがわかった。

上述の分析結果は、帰国後4月の段階で一度上がった語彙スコアが、2年次の7月の段階では下がり、GCC_UVic参加直前とほぼ同じ水準まで戻る逆V字型の変動をしている可能性を示している。つまり、

GCC_UVicに参加することによって参加者の語彙能力は一旦上昇するが、帰国から約3カ月経過した後には渡航前のレベルまで戻っている可能性が示されている。

2-4. Versantテスト流暢さスコア

続いて、流暢さスコアの推移について分析する。分析方法は、従属変数をVersantテスト流暢さスコアとし、3回の受験時期を独立変数（被験者内要因）に置いた1元配置の分散分析である（表5）。

表5 Versantテスト流暢さスコア平均の推移

	1年次2月 (出発直前)	2年次4月 (帰国直後)	2年次7月 (帰国より3か月後)	分散分析結果
Versant流暢さスコア 平均 (標準偏差)	39.18 (7.72)	45.91 (8.22)	39.21 (7.28)	F(2) = 29.56, p<.01

流暢さは、発音と並んで日本人が苦手とするスコアである。下位検定を行ったところ、2月の流暢さスコア平均と4月の流暢さスコア平均、および、4月の流暢さスコア平均と7月の流暢さスコア平均との間には統計的に有意な差があり、かつ、2月の流暢さスコア平均と7月の流暢さスコア平均との間には統計的に有意な差があるとはいえないことがわかった。

これは、先に挙げた語彙スコアと同じ逆V字型パターンである。つまり、上述の分析結果は、帰国後4月の段階で一度上がった流暢さスコアが、2年次の7月の段階では下がり、GCC_UVicの参加直前とほ

ぼ同じ水準まで戻っている可能性を示唆している。すなわち、語彙能力同様、参加者の流暢さ能力もまた、GCC_UVicを介して一旦上昇するものの、帰国から約3か月が経過すると、渡航前のレベルまで戻る可能性が示されている。

2-5. Versantテスト発音スコア

最後に、発音スコアの推移について分析する。分析方法は、従属変数をVersantテスト発音スコアとし、3回の受験時期を独立変数（被験者内要因）に置いた1元配置の分散分析である（表6）。

表6 Versantテスト発音スコア平均の推移

	1年次2月 (出発直前)	2年次4月 (帰国直後)	2年次7月 (帰国より3か月後)	分散分析結果
Versant発音スコア 平均 (標準偏差)	37.18 (5.87)	40.03 (6.39)	42.27 (6.81)	F(2) = 24.16, p<.01

下位検定を行ったところ、2月の発音スコア平均、4月の発音スコア平均、および、7月の発音スコア平均、すべての平均値間に統計的に有意な差があることがわかった。これらのスコアの推移から推測すると、一度伸びた発音能力は、時系列的に徐々に上昇していく可能性が示されたといえる。

2-6. ここまでの分析まとめ

本節では、2-1から2-5にわたって紹介してきた、初年次2月、海外研修をはさんでの2年次4月、海外研修から約3か月後の2年次7月の3回にわたるVersantテストスコアの推移を追跡・分析した結果をまとめる。

●Versantテスト総合スコアに着目すると、GCC_UVicに渡航する前に比べて帰国直後のスコアが高くなっており、そのスコアは、帰国後約3か月が経

過した7月の段階まで維持されている可能性が示された（2-1、図1）。

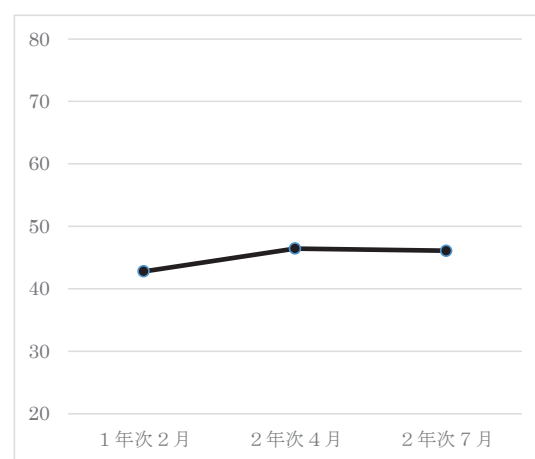


図1. Versantテスト総合スコア推移

●Versantテストスコアを構成する4要素別に見ていくと、スコアの推移には大きく3つのパターンが存在する可能性が示唆された。第一に、時系列的な変

化がない場合、第二に、帰国直後に一旦上昇し、その後落ちる逆V字型となる場合、第三に、時系列的に伸び続ける場合である。

- 第一のパターンに当てはまるのが、文章構文である(2-2、図2)。

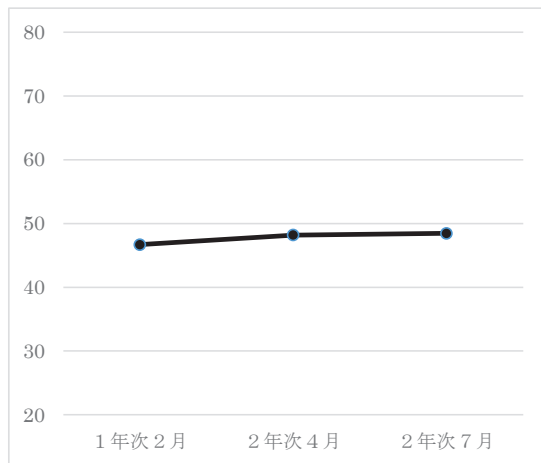


図2. Versantテスト文章構文スコア推移

- 第二のパターンに当てはまるのが、語彙と流暢さである(2-3および2-4、図3および図4)。

- 第三のパターンに当てはまるのが、発音である(2-5、図5)。

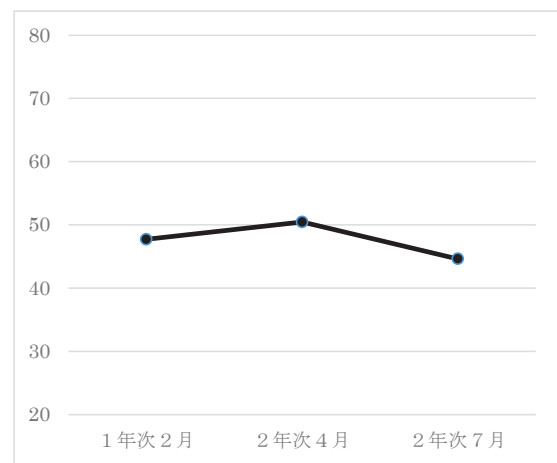


図3. Versantテスト語彙スコア推移

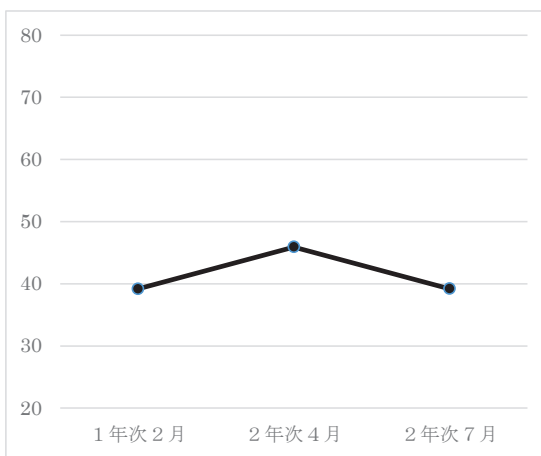


図4. Versantテスト流暢さスコア推移

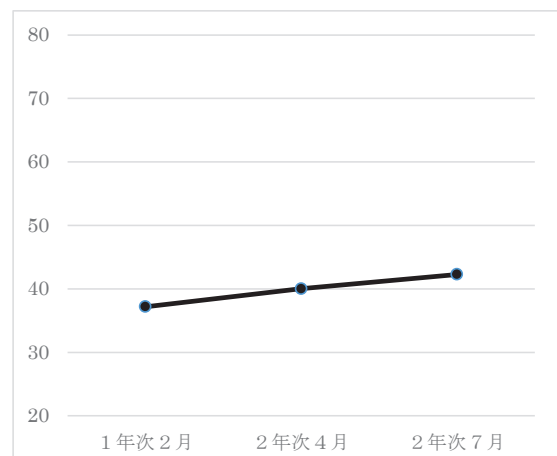


図5. Versantテスト発音スコア推移

現時点では分析対象は33名であり、今後も時系列的なデータを追跡・蓄積して、分析を続け、Versantテストスコアの推移を確認していく必要がある。

3. まとめ：帰国後のフォローアップとGC総合演習

第2章より、GCCの要であった初年次春期実施のGCC_UVicに参加した学生の英語運用能力推移の一端

を知ることができた。

Versant総合スコアに関しては、GCC_UVicを経て参加者が培った成果は、帰国後、2年次7月段階まではほぼ維持されているといえる。しかしながら、各スコアを詳細に見ていくと、文章構文(文法)については帰国前後で特に変化がなく、現地の英語に約1か月触れることによって培われた発音は帰国後も継続して伸びていくが、語彙と流暢さは帰国後に顕著に落ちる傾向が見て取れる。

今回の分析は、Versantテスト各スコアの平均値を分析対象としたものである。よって中には、平均的な学生とは異なり、2年次7月段階のスコアを全般的に維持・上昇させることができていたGCC_UVic参加者も若干名含まれている。うち、2名の学生に対し、帰国後どのような勉強をしていたのかを訊ねる機会を得ることができた。その結果、スコアが落ちなかった学生の共通点として、目的は何でもよい（たとえば娯楽のためでもよいし、各種英語運用能力テストの目標点数・級を達成するためでもよい）ので、毎日、自発的に、必ず英語に触れ続けることが挙げられている。

加えて、今回の分析対象者33名の中には、2年次の前期で一旦スコアを落としたものの、後期になってから官民主導のKAKEHASHIプログラムやTOMODACHIプログラム等に本格的に参加して英語を用いた活動を自発的に続けた学生や、カナダとは異なる英語圏へ新たに研修に出向いた学生が少なくとも4名いることが確認されている^[5]。

外国語を用いた活動を継続することで一度身につけた力を維持増進できるのは、ごく当たり前のことではある。しかし、この当たり前のことを自発的に継続できる仕組みを十分に提供できていたかどうかに関しては、GCC時代は学生の自己責任に任せていた部分が大きく、教育的観点からのフォローアップに限界があったことは渡邊（2015）にも示されていたとおりである。

3-1. GC総合演習2と3の新設と課題

2年間のGCC試行から明らかになった、初年次春期海外研修後のフォローアップ、とりわけ、海外研修で身につけた語彙と流暢さを落とさず維持するための新たな試みは、GC副専攻の基本プログラムに即反映されている。その反映のひとつが、GC副専攻の修了認定まで継続開講される必修演習科目「GC総合演習1～3」の設置である。

初年次後期、GC副専攻正式登録者を対象に開講されるGC総合演習1は、春期海外研修渡航の準備を主眼に置いた演習科目である。その後、2年次になってから開講されるGC総合演習2（前期）とGC総合演習3（後期）は、学生が帰国後も継続的・自発的に外

国語で学び、アウトプットする機会を作り出すことが主目的の演習科目である。

2015（平成27）年度後期、GC副専攻第1期生を対象としたGC総合演習1が新期開講され、GC総合演習2および3は、2016（平成28）年度からの新設・実践となる。なお、帰国後の継続的学習を促す仕掛けの一環となるGC総合演習2および3用の教材開発研究費用として、筆者は、平成27年度公益財団法人科学技術融合振興財団の調査研究助成を受けることが決まっている。「海外研修参加者を対象とする必修演習科目における、参加者自身によるゲーミング・シミュレーション教材作成の効果、および、その検証」をテーマとする実践研究において、2016（平成28）年2月から2018（平成30）年3月までの間に、GC総合演習2および3を介し、筆者は帰国後のフォローアップ教材の開発と実用化、および効果検証を行う。GCCの成果をふまえ、GC副専攻に引き継がれた課題を解決するためのPDCAサイクルが、この実践研究を起点として新たに始まることになる。

注

- [1] GCC_UVicに参加する学生は、現地にて英語で行われる授業内容を聞いて最低でも7割程度を理解でき、多少の文法の間違いを気にせず英語でアウトプットできる状態で渡航すること、より具体的には、Versantテスト40点以上、あるいは、TOEICテスト650点以上かつリスニングパート350点以上を獲得していることを目安として選抜されている。
- [2] Versantテスト公式サイト：<http://www.versant.co.jp/>
- [3] 2016（平成28）年1月現在、GCC第1期辞退・除籍者は10名、第2期辞退・除籍者は8名確認されている。GCCの登録が初年次7月に行われたのち、標準修了年次である2年次を満了しないうちに、合計18名が姿を消していることになる。除籍の理由は極めて単純であり、修了認定に必要な要件を満たさなかった場合である（年次成果報告書を提出しなかったため、学修成果を確認できなかった）。一方、辞退の理由はもう少し複雑である。主に挙げられている理由は、主専攻との両立が難しくなったこと、英語学習以外への関心が高まり英語に時間を割けなくなったこと、主に経済的な事由（家族の入院などによる急な医療費の支出）により海外研修に行く余裕がなくなったことである。

- [4] 社会人入学・編入等により英語科目の単位認定が既に

なされている学生、および、英語の必修科目が1年次のみ開講される学部に所属している学生は、2年次のVersantテスト受験が免除されている。今回の分析では、2名のGCC_UVic参加学生が上記条件にあてはまっているため、分析からは除外されている。

- [5] 初年次春期の海外研修を経たのち、時間的・経済的に余裕があれば他の英語圏やその他外国語圏に行きたいと思っている学生は多い。しかしながら、最も大きな問題として立ちはだかるのは、高額な研修費用である。たとえば英国の研修であれば70万円程度、GCC_UVic以外のカナダの研修であれば50万円程度の自己負担金がかかる。これだけの金額は、容易に何度もねん出できるものではない。一方、官民主導の各種プログラム（KAKEHASHIやTOMODASHIなど）であれば、渡航費用・現地滞在費用・移動費用のほとんどを主幹たる官民組織が負担するので、参加者の自己負担額は非常に小さくて済む。また、交流協定先の大学で受ける英語教育プログラムとは目的と方向性の異なる課外学習を経て、学ぶところも多い。GC副専攻第1期生向けにと申請した2016（平成28）年度KAKEHASHIプログラムは残念ながら落選してしまった。しかし、経済的な問題が解決するのであれば渡航したいと考える意欲ある学生への課外学習チャンスを提供する試みを、以降も継続して進めていく必要があるだろう。

引用文献

- 渡邊席子（2014）, 「OCUグローバル・コミュニケーションコース 2013年度試行の記録」, 『大阪市立大学 大学教育』, 第11巻, 第2号, 79-86.
- 渡邊席子（2015）, 「GCC（グローバル・コミュニケーションコース）からGC（グローバル・コミュニケーション）副専攻へ～2013年度から2014年度にかけての2年間のGCC試行を振り返る～」, 『大阪市立大学 大学教育』, 第12巻, 第2号, 7-18.
- 大阪市立大学 副専攻運営小委員会（2015）, 『大阪市立大学 副専攻ガイド 平成27年度』